

小川雅人編著『持続性あるまちづくり』創風社（2013年）

全国各地で、地域の活性化を目的としたまちづくりが推進されている。しかし、全国の地域、とりわけ地方都市における中心市街地や商店街の衰退、雇用の創出などの問題を鑑みれば、まちづくりによって成果を生み出している例は少ないのが現状である。とりわけ、地域で暮らす人々や働く人々が主体となったまちづくりの事例はさらに少ない。国や地方自治体もまちづくりに力を入れている。それにも関わらず、なぜ、まちづくりによる成果を見出すことができないのだろうか。

本書は、まちづくりを「自立的で継続的な地域活動」ととらえ、いかにして地域の資源を活用して個性を主張していくか、いかにして地域の経済循環を成立させるかについて、社会的側面と経済的側面の両面から考察している。本書におけるまちづくりの発展性と主体性に注目すると、全国の地域に共通したまちづくりの根源的な課題が見えてくる。まちづくりの主体性すなわち担い手は、地域の住民、中小企業・商店の経営者や労働者などである。各主体がまちづくりに対して理念をもって意識的に参加し、連携していくことが必要である。まちづくりの発展性すなわち地域の経済循環の基軸となるのは、地域における雇用と生活の場の確保である。地域の産業の活性化を進め、雇用を創出し、生活の場を確保していく必要がある。まちづくりは、地域にある特定のエリアの活性化でもなければ、特定の産業の活性化でもない。地域全体の活性化に関わる問題である。

しかし本書で指摘されているように、各主体のまちづくりに対する消極的な意識、まちづくりにおいて中心的な役割を担うリーダーの不足、各主体が参加・連携する仕組みづくり、地域経済の循環の再構築などには課題が残されている。本書では、商業、農業、工業、エネルギー、観光、交通、都市計画といった地域の課題を取り上げ、福井県の市町村などで推進されている事例を基にそれらの課題を解決するための糸口を探っている。例えば、第1章、第3章、第6章、終章では、起業家の活躍、組織づくり、リーダーシップ、商店街の役割など地域農業や地域商業が活性化しつつある事例を基に考察を深めている。ここで重要なことは、取り上げられている事例は、必ずしも農家や商店街だけでなく地域全体の活性化に結びついていることである。起業家の活躍など新しいリーダーの登場は、各主体のまちづくりに対する意識を高め、互いに連携しながら地域の課題を解決していこうとする取り組みを生み出している。また、連携を通じた産業の活性化や雇用の創出にも貢献している。

本書は事例を緻密かつ多面的に考察しており、全国の地域で生じているまちづくりの課題を解決するための糸口となるものと考えられる。地域で暮らす人々や働く人々にとって、住みやすく働きやすい環境を整備していくためには、事例に見られるような取り組みが必要不可欠である。とはいえ、本書の内容は、あくまで一時点あるいは一定期間の事例を基にした考察にとどまる。長期的な視点に基づき、地域全体でどのような成果が現れるかは、今後の課題といえよう。さらに成果には、企業数や労働者数の変化といった数値的な実績も求められるであろう。それゆえに、これらの事例を継続的に考察していく必要性も示唆している。いずれにせよ、地域全体の活性化には、地域で雇用と生活の場を確保し、地域で暮らす人々や働く人々が積極的にまちづくりに参加し、連携する仕組みを構築していくことが必要といえる。結局のところ、まちづくりの最大目標は地域の「ひとづくり」だといえよう。（唐澤 克樹）